

# 戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者

広<sup>\*</sup> 瀬 貞 三

はじめに

戦前の日本で、多くの朝鮮人労働者は各種土木工事に従事した。私はこの間、三信鉄道工事（長野県）、太田川発電所工事（広島県）、富士川水系笛吹川改修工事（山梨県）、木曾川発電所工事（岐阜県、長野県）を取り上げ、朝鮮人労働者の労働と生活の実態を明らかにしてきた。<sup>〔1〕</sup>今回は新たな事例研究として、庄川水系庄川（以下、庄川）における小牧ダム建設を取り上げる。小牧ダムは日本電力系の庄川水力電気が一九二五年五月に着工し、一九三〇年一月に竣工した大型ダムである。

今回、小牧ダム建設に注目したのは、次ぎの二つの理由からである。第一に、小牧ダムは当時日本最大のコンクリートダムであつた点である。小牧ダムは堤高七九・二m、堤頂長三〇〇・八m、堤体積三〇万m<sup>3</sup>のアーチ型重力式コンクリートダムである。これはそれ以前の最大のダムである大井ダム（堤高五三・四m、一九二四年竣工、木曽川水系）を大幅に越えたもので、アジア最大の大ダムの建設である。出力は七万二〇〇〇kWであり、これも日本最大だった。

第二に、小牧ダムは最近、「近代土木遺産」、「近代化遺産」への関心の高まりにより注目を集め、多くの著書で取り上げられている。<sup>(2)</sup> それにもかかわらず、建設会社や工事を直接担当した土建労働者（日本人、朝鮮人）に関しては一切言及されていない。

小牧ダムと朝鮮人労働者に関する先行研究はない。注目されるのは、次ぎの二つの著書である。第一に、堀江節子・此川純子・内田すえのが行なつた黒部第三発電所に関する研究である。これは日本電力によって施工されたもので、一九三六年五月に着工し、一九四〇年一月に竣工した。施工は富山県を地盤とする佐藤組であり、この工事における朝鮮人労働者の存在を明らかにしたものである。<sup>(3)</sup> 堀江らは当時の富山県内の新聞を詳細に調査し、それらの中に小牧ダム建設に従事する朝鮮人労働者の記事を年表の中で紹介している。しかし、堀江らの関心は黒部第三発電所にあるため、それ以上の分析はなされていない。

第二には、富山近代史研究会がまとめた富山県内の朝鮮人に関する新聞記事目録である。これは『富山日報』、『北

陸タイムス』、『北日本新聞』を対象とし、一九〇六年から一九四五年まで、合計一七八九件の表題を網羅した労作である。<sup>(4)</sup> 小牧ダムに関する記事の表題も含まれるが、文章化はされていない。

本稿は以上のような研究現状に鑑み、以下の三点に注目する。第一に、小牧ダム建設と工事請負体制を明らかにすることである。第二に、小牧ダム建設にどれだけの労働者（日本人、朝鮮人）が参加し、どのような労働と生活を行なったのかである。第三に、土木現場における朝鮮人の労働組合結成の動きである。

電力会社、建設会社の詳細な史料が残されていないため、やむなく新聞記事を使用する。すでに内田すえのが『北陸タイムス』を詳細に調査しているので、今回は『富山日報』<sup>(5)</sup>の記事を中心に見ていく。

## 一・小牧ダム建設計画の開始と挫折

### (1) 小牧ダム建設計画の開始

庄川はその源を岐阜県大野郡莊川村の烏帽子岳（標高一六二五m）に発して西北流し、尾上郷川と武蔵川を合流する。平瀬付近で大白川を合わせ屈曲の多い峡谷を北流し、さらに県境で境川を入れ、富山県に入る。富山県内では小牧付近で利賀川を合わせ、礪波平野を貫流して射水平野に入り、和田川を合流し、新湊市で富山湾に注ぐ。幹川の延長は一一五kmである。庄川の上流部は比較的多雨地帯に属するため、河川の水量は豊富で、かつ平均縦断勾配も約

戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者（広瀬）

七〇分の一と急峻なため、水力発電には好条件である。<sup>(6)</sup>

庄川での水力発電所建設を最初に計画したのは、浅野財閥の創立者である浅野総一郎（一八八四～一九三〇）である。このために庄川水力電気（浅野社長）が一九一九年九月、東京市において資本金一〇〇〇万円（一九二一年六月末時点で二五〇万円払い込み）で設立された。浅野が総二〇万株のうち一四万株を所有した。庄川水力電気は富山電気社長の高岡又左衛門が監査役を勤め、一九二五年に本社を大阪市に移した。

庄川水力電気は一九一九年一月、すでに庄川の水利権を獲得していた。当初はセメント工場等の動力源として、庄川下流の東砺波郡東山見村に小牧発電所の設置を計画した。新たに見込まれる余剰電力の販売のために、一九一九年一二月に宇治川電気との間に大口電力供給契約を結んだ。この契約は、一九二一年四月に宇治川電力から日本電力に受け継がれた。

小牧発電所の建設はアメリカのストーン・アンド・ウェブスター社によって一九二二年以降進められた。しかし、当時の不況や一九二三年の関東大震災の影響もあり、容易に進まなかった。<sup>(7)</sup>

## （２）小牧ダム建設に対する地域住民の反対闘争

小牧ダム建設計画は地域住民（特に木材業者、漁民、農民等）から強い反対を受け、訴訟問題にまで発展した。これは「庄川問題」と呼ばれた。ここでは簡単に触れることにする。

庄川は古くから河川を利用した木材運送が中心だった。小牧ダム建設計画が明らかになると、特に木材業者や流木

従事者は死活問題として反対運動を行なった。中心になったのは飛州木材（資本金五〇万円）である。一九二六年五月、同社の専務取締役である平野増吉（一八七八―一九五九）は発電工事認可の取り消しを求めて富山県知事を訴えた。庄川流域の庄川・白川・清見・利賀・青島各村も村議会の決議を得て、飛州木材の訴訟に加わった。関連町村は住民全体で、反対期成同盟を次々に結成した。一九二八年二月、富山市の新富座に約五百名が集まり、反対集会を開いた。一九二九年六月、青島村に反対派の約二千名が集集し、庄川沿岸連合大会が開かれた。また、北陸タイムス社も工事反対のキャンペーンをはった。

訴訟の中心となったのは流筏権だった。審議の過程で、ダム湛水後の木材流送の可能性が争点となった。庄川水力電気は富山県知事の命じたダムの付帯設備として、木材流下設備と魚道を設けてダムの湛水に備えた。一九三〇年四月にダム本体が完成して湛水が始まる直前、飛州木材は大阪地裁に小牧ダムの仮排水路閉鎖禁止と木材流下設備工事禁止の仮処分を求める新たな訴訟を行なった。裁判所は三〇万円の保証を条件に工事禁止の仮処分を発したため、湛水開始と工事は一時中止となる。これに対して庄川水力電気は仮処分命令執行停止の申し立てを行い、一九三〇年六月に大阪地裁は民事裁判としては異例の実地検査を実施した。同年七月、大阪地裁の判決は仮処分を取り消す内容で、飛州木材は結局敗訴に終わった。一九三〇年九月、小牧ダムの仮排水路は閉鎖されて湛水がなされ、同年一月に小牧発電所は送電を開始した。

裁判に敗れた飛州木材は小牧ダム湖の流送と小牧ダムの流木装置が不能であることを証明してその後の裁判を有利

に展開するため、設備の計画量を超える多量の木材を一気に流して、庄川水力電気との対決姿勢を強めた。一九三三年一月には小牧ダムに流された流材の搬出をめぐって飛州木材の四百名、庄川水力電気の二百名、計六百余名が二時間、間に渡って武力衝突し、双方に多数の負傷者がでた。これより先、庄川水力電気は上流地域の流木補償の一つとして岐阜県越美南線の白鳥駅から白川村の鳩ヶ谷に至る三二kmの自動車建設費一二〇万円を負担することになり、いわゆる「百万円道路」の建設が行なわれていた。一九三三年三月、数回にわたる実地検証をもとに大阪地裁は飛州木材の流木権を認め、庄川水力電気は飛州木材に二〇万円を支払うことを命ずる判決を出した。双方は判決に不服であり、直ちに上告した。しかし、情勢は庄川水力電気に有利に展開していった。この結果、同年八月、湯沢三千雄（一八八八―一九六三）内務局土木局長の和解案を双方が受け入れ、八年間に及ぶ争議は決着を見た。<sup>⑧</sup>

ダイヤモンド社の石山賢吉（一八八二―一九六四）社長はこの争議における飛州木材の立場を支持し、「筆者は此事件に於て電気会社側を憎らしく感じたのである。電気会社側は電気会社側として色々の事を云つて居るが、それは要するに、自家弁護の範囲を出ない。所謂強者の詭弁である」と述べている。<sup>⑨</sup> 庄川問題はダム建設と地域社会の対立構造を考える上で、現在でも重要な問題点を提示している。<sup>⑩</sup> また、ここでは朝鮮北部における日本窒素系電力会社によるダム建設である赴戦江工事（一九三〇年第二期竣工）、長津江工事（一九三七年第三期竣工）、虚川江工事（一九四五年工事中止）、水豊ダム工事（一九四四年竣工）においては、このような民間企業や地域社会から電力会社に対して訴訟がなされなかったことだけを指摘しておく。<sup>⑪</sup>

## 二・小牧ダム建設の再開と工事の概要

### (1) 小牧ダム建設の再開

一九二五年七月、日本電力（山岡順太郎社長）が浅野社長所有の株式の一部を肩代わりし、発電所建設及び資金調達を委託された。工事の最高責任者は石井顕一郎（一八八五～一九七二）である。石井は一九二五年に浅野の懇請を受けて、庄川水力電気に土木課長として入社した。石井は小牧ダムの企画、設計、施工にあたった。石井は一九一一年東京帝国大学校工科大学を卒業後、横浜市水道局、高松市水道工事を経て、一九一八年に通信省西部通信局水力課長となった。<sup>(12)</sup> 石井は日本電力で一九二八年六月から土木部長を務めた。<sup>(13)</sup> また、小牧ダム工事は物部長穂（一八八八～一九四一）東京帝国大学校助教授が明らかにした耐震設計理論を適用した最初のダムであり、日本における大ダム建設の重要な始発点となった。<sup>(14)</sup>

小牧ダム工事の全体像は図1の通りである。庄川は水量が豊かだったが、勾配が緩やかだったために、堤高七九・二m、堤頂長三〇〇・八m、堤体積三〇万m<sup>3</sup>のアーチ型重力式コンクリートダムである小牧ダムを築く。溢流部には、テンダーゲート一七門を設置する。小牧ダムから延長一二二〇m、内径六・六mの隧道で川水を下流の小牧発電所に導き、七万二〇〇kWを得るものだった。石井は小牧ダムの設計に、復興局橋梁課嘱託技師で隅田川橋梁工事に参加していた、後の建築家山口文象（一九〇二～一九七八）の協力を得た。

[illegible]

久保田雄二編『日本電力株式会社十年史』（日本電力、1933年）513～514頁。



工事は一九二五年四月の仮排水路の起工から始まり、一九二六年三月にこれは竣工した。その後、ダム本体工事に着工した。基礎の掘削は左岸が一九二五年八月に着工し、一九二八年三月に完了した。右岸は一九二五年一〇月に着工し、一九二六年一〇月に終了した。ダム中央河床部は一九二六年二月に着工し、一九二七年一月に完了した。一九二六年七月からダム本体のコンクリート打設を開始し、一九二八年を最盛期として、一九二九年末にはほとんど竣工した。

工事材料を運搬する鉄道建設工事を一九二五年一二月から開始した。これは加越線青島町駅を起点に、青島ヤードを経て、上流は小牧に、下流は砂利採取地（砺波郡柳橋地内）に至る専用鉄道である。青島ヤードは青島材料置場のことで、全ての工事材料集散地である。運輸事務所を初め操車場、セメントや機械その他の倉庫、及び修理工場が軒をつらねていた。ダムや発電所、その他付属工事に使用された龐大なセメントは全て浅野セメントだった。セメントは主に麻袋入りを使用し、国鉄は一五トン車に八三〇八五樽分（袋二八五〇二八九）を積載した。

発電所の隧道工事は一九二五年四月に起工し、一九二七年八月に掘削を完了し、巻立工事に移り、一九二九年夏には工事が完成した。また取入口、調整水槽、発電所その他の土木工事は一九二六年に着工し、一九二九年四月に竣工した。一九二八年三月から発電所本館建築に着手し、一九二九年一月に落成した。前述したように庄川問題の訴訟のため、発電開始は遅れた。小牧発電所は一九三〇年一月にようやく運転を開始した。築造に要したセメントは四〇万樽以上に及んだ。<sup>15)</sup>

工事の最高責任者の石井は戦後、小牧ダム工事を回顧して、建設工事よりも飛州木材による訴訟問題が大きな難関であったと、次のように述べている。「電気会社としては、ダムの工事が大体出来た頃突然勃発した〔訴訟〕事件であつたから、会社の自衛上由々しい問題であつた。しかし何と言つても、一番苦しい立場に立つたのは工事責任者である私であつた。私の場合には利害を超越して、自分の造つたかわいい仕事、折角出来ながら水を貯めることが出来ないかも知れないことになつたのであつた。当時、私は東京、大阪、富山と現場をたび歩き（中略）余りに頭と体を虐待し、遂に生来頑健でない体に大病を誘発するもを作つた程であつた」<sup>(16)</sup>。

小牧ダム建設工事は施工上多くの新技術を導入したため、一九二八年五月土木学会の五〇余名（団長…井上秀二副会長）は工事現場を視察した。彼らは「今年度中に全部竣工の予定で、目下設備の全能力が発揮されてをる。此の位の大工事であるが現場は全体に整頓してをるのは見る人に好感である」<sup>(17)</sup>と高く評価した。

## （２）工事を受注した加藤組と佐藤組

小牧ダム堤体の築造は庄川水力電気の直営とした。<sup>(18)</sup>それ以外の工事を担当したのは、富山県を拠点にする建設会社の加藤組と佐藤組である。

最初に工事を受注したのは加藤組である。加藤組は加藤金次郎（一八八四～一九六六）が創立した建設会社である。加藤は父親の家業である建設業を引き継ぎ、一九〇二年に加藤組を設立し、一九一八年には株式会社に改組した。加藤組は、立山水力電気工事（一九一八年請負）、亀ヶ谷水力工事（一九一九年請負）、県営鉄道工事（一九二〇年請

負）、加越鉄道工事（一九二一年請負）などの富山県内の工事を施工していた。これに加えて、樺太・豊真鉄道工事（一九二〇年請負）のように遠方の工事も施工していた。加藤組はすでに一九二二年に浅野から小牧ダム工事を請負った実績があった。<sup>(19)</sup> 加藤組は加藤が「純粹独裁政を敷き、所謂個人経営下に發展しつつあるところに異色がある」と評された。加藤を補佐したのは、飯塚虎一、鷹取健次郎である。また、加藤は土木工事だけでなく、富岩鉄道、立山過泉を経営し、富山銀行の監査役も勤めた。<sup>(20)</sup>

佐藤組は途中から工事に参加した。佐藤工業の社史では、「庄川水力発電株式会社による小牧水力発電工事が大正十四年3月に開始され、佐藤組はこの工事を請負い、昭和3年10月に完成した」と記している。<sup>(21)</sup> 佐藤組は一八八二年に初代佐藤助九郎（一八四七～一九〇四）が富山県で創業した。二代佐藤助九郎（一八七〇～一九三二）の時代に水力発電所工事へ参加していった。佐藤組は小牧ダム建設以前に富山県、石川県、岐阜県、長野県で庵谷発電所（一九一八年竣工）、吉野谷発電所（一九一九年竣工）、宮川発電所（一九二三年竣工）、瀬戸発電所（一九二三年竣工）、桃山発電所（一九二三年竣工）、蟹寺発電所（一九二五年竣工）など水力発電所工事を多数行なっていた。小牧ダム竣工後の一九三二年七月に組織を改め、佐藤工業（資本金二〇〇万円）を設立した。<sup>(22)</sup> 佐藤組の土木部門の責任者は杉野久松であり、彼の下で工事を指導したのは今村弥三郎、塚田久太郎、今藤昌胤、佐藤久雄だった。<sup>(23)</sup>

工事是一九二五年四月にまず加藤組によりダム仮排水路工事、締切工事から着手された。しかし、工事の規模が大きいので、資材運搬のための鉄道の敷設が必要となり、佐藤組に鉄道建設とダム掘削、ダム工食用骨材採取が特命で

発注された。<sup>(24)</sup> 骨材として、庄川の川砂利が使用された。砂利採取現場は、東砺波郡太田村地内、同郡中野村地内、東山見村金屋地内、同村小牧地内の四ヶ所だった。この龐大な砂利採取はほとんど人力によった。また、佐藤組は小牧ダム取入口から取水し、発電所までの延長一二二〇m、内径六・六mの隧道、小牧発電所も施工した。<sup>(25)</sup> 庄川水力電気専用鉄道は工事材料運搬のために、加越鉄道の終点青島町から庄川に沿って、小牧ダムまで四・七kmの専用鉄道を敷設した。これは一九二六年一月に輸送を開始した。<sup>(26)</sup>

工事用の建物は青島ヤード（青島材料置場）内に建造され、事務所を中心に、社宅、土工の飯場、倉庫、諸工場が軒を連ねた。これらの建物は工事現場の小牧、湯山、湯谷はもちろん金屋、青島にまで及び、大変なにぎわいを呈した。倉庫の数は一七七棟、総建坪五四七三坪である。ダム工事の主要資材であるセメント倉庫は青島ヤードが一・一三坪、小牧が一九八坪であり、六万樽の収容能力を持っていた。小牧ダム建設工事は一九二九年末に流木設備を除いて、ほとんど完成した。<sup>(27)</sup>

### 三・朝鮮人労働者の労働と生活

#### (1) 朝鮮人労働者の工事参加

〔富山県の朝鮮人土建労働者〕

加藤組がいつ頃から朝鮮人労働者を使用していたのかは明らかではない。ただ、一九二三年五月の『富山日報』に「加藤組配下の鮮人溺死」の記事があり、この時点で朝鮮人労働者を使用していたのは明らかである。<sup>(28)</sup>

佐藤組は一九一七年九月、富山電気の庵谷発電所拡張工事で佐藤組配下の朝鮮人飯場頭が恐喝傷害で懲役六ヶ月を受けている。つまり、この時点で佐藤組にはすでに朝鮮人労働者がおり、しかも飯場頭の地位にまで上昇していた者がいたことがわかる。<sup>(29)</sup>

一九二六年二月時点で各種土木工事の活発化により、富山県に日電水力工事、小牧ダム工事、神通川改修工事に従事する朝鮮人労働者が少なくとも三千名はいるだろうと推定された。また、年末には四、五千名になるのではないかと予測されていた。県内の朝鮮人労働者について、次ぎのように述べている。「家族的の労働者は至つて少なく、大部分は皆単独な労働者であるだけに此労働鮮人達は悉く働かれるだけ働いて飲み食ひをする外に一金たりとも蓄積しようとの観念はなく、其日々々を飲食して候の器械的労働状態であるさうだ。(中略)食物は朝鮮内地に居るとは違ひ何れもが白い御飯をのみ食し居るが、菜などに至つては豪も懸念すること事なく何でも食するのであるが、是等の

鮮人達は唐辛子を食する事が夥だしいもので御飯の上にもお汁の中にも赤くなる程かけて之を食しをれる」。<sup>(30)</sup>

富山県内の朝鮮人数は一九二六年九月末時点で、二六六五名だった。これらの多くは発電所工事に従事する土建労働者である。富山県市町村課は「沢山の鮮人が入込んで居るが、絶えず流動して歩く連中」と見ていた。<sup>(31)</sup> 大量の朝鮮人労働者が富山県内に流入するため、一九二七年一月から富山警察署は「鮮語講習会」を毎週土曜日の午後開始することになった。<sup>(32)</sup>

一九二七年五月、富山県警察部の調査によれば富山県内に二三二九名の朝鮮人がおり、男性は二一五六名、女性は一七三名である。男性が女性の約一二・五倍である。男性の大部分が土建労働者である。警察署管内別で見れば、三日市（黒部ダム工事）の八六九名、井波（小牧ダム工事）の四六九名、富山の二二四名、大久保の一六三名などとなる。年度により労働者数は変動し一九二六年八月には三千名の朝鮮人がいたが、一九二七年度は減少を見せた。<sup>(33)</sup>

一九二七年八月、富山県の朝鮮人労働者は三五〇〇～三六〇〇名である。このうち土工は二八〇〇～二九〇〇名と大多数を占めており、その他は仲仕、湯屋の三助、自動車運転手などである。賃金は前者が二円内外、後者は二円二〇～三〇銭である。一般的に日本人より二〇銭、三〇銭～五〇銭位の差があった。<sup>(34)</sup> 同年十一月末時点で、富山県の朝鮮人土建労働者は約四六五〇名である。工事現場は、主に黒部川、常願寺川上流の県営水電工事、庄川上流の昭和、庄川の両発電所工事である。<sup>(35)</sup>

一九三〇年八月時点で、富山県特高課の調査では県内の朝鮮人は二一六七名（男性一八三二名、女性三三五名）と

している。男女比は男性が女性の約五・五倍である。その多くは飛越鉄道工事、昭和ダム工事に従事していた。日本語に通じる者は約五〇名に一名であり、日本人女性を妻にしている者も四名いた。<sup>(36)</sup> 一九二七年よりは女性の数が増加しているのが特徴である。

富山県の土木工事現場では冬になると降雪のため、工事が中止になる。そのため、朝鮮人労働者は職を失い、生活が困難な状況となった。一九二七年二月、この状態を『富山日報』は次ぎのように書いている。「冬枯れの降雪期に差しかゝるや外部の仕事が一時手控へとなつたため、方々の工場では多数人夫を整理する事になつたので、旅稼ぎをする鮮人はトンと生計の途が断たれ、中にはつまらない品物の行商人となつて市内各戸を荒し廻り其場限の取引で而も強制的な不正手段を用ひ歩く」。<sup>(37)</sup>

富山県高等警察課の調査によれば、一九二七年二月末時点の朝鮮人数は五六七〇名であり、夏季における朝鮮人数の約半数である。これは一九二六年二月末現在の約四分の一である。一時期、富山県の朝鮮人数は一万五〇〇〇名以上だったが、関係者は「工事竣成と財界不況の為に漸次他県に移稼したのである」<sup>(38)</sup>と見ていた。

#### 〔小牧ダム工事の労働者の規模〕

小牧ダム建設工事に従事した労働者数は延一〇〇万人である。<sup>(39)</sup> しかし、これでは一日当たりの労働者数や季節毎の労働者数がわからない。

一九二五年六月時点で、加藤組は日本人約三〇〇名、朝鮮人一〇〇名を使用していた。佐藤組は日本人、朝鮮人を戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者（広瀬）

合わせて三〇〇名であり、合計七〇〇名だった。<sup>(40)</sup> 少なくとも一〇〇名以上の朝鮮人がいたのである。同年八月時点では、小牧ダム建設現場の労働者（日本人、朝鮮人）は二千数百名が工事に従事していた。<sup>(41)</sup> これには地域住民の数も含まれていると思われる。

一九二六年六月に宇奈月で発生した天然痘防止のために、小牧ダム建設工事関連者に富山県は種痘を行なうことになった。対象は会社関係者が四〇〇名、佐藤組の土工が一千名、加藤組の土工が二五〇名、東山見村民が四〇〇名、青島村民が三〇〇名、合計二五〇〇名である。後者の村民がこの項目に掲載されていることは、おそらく地元住民として工事現場で働いていたと思われる。<sup>(42)</sup> つまり、一九二六年六月時点で一日当たり二五〇〇名の労働者がいたと思われる。

一九二七年四月一日、庄川水力電気の工事場に日本人四〇〇名、朝鮮人二〇〇名の計六〇〇名によって「共励会」が組織された。共励会は「両者の融和を図るを以て目的とし、相互儉約貯蓄の美風を涵養し風俗の矯正、衛生思想の普及相互の共済事業を主眼とし、時々懇親会や慰安会開催して隔てなき意見の交換を行ふ」予定だった。<sup>(43)</sup> おそらく富山県警察が主導したものであろう。この時点で朝鮮人二〇〇名が確認できる。同年八月、庄川の川原では男性に混じって女性も砂利採取工事に従事していた。これは日本人であろう。「一日の稼高二円或は三円の賃金を得るので、太田、中野、柳瀬の川筋の女は稼ぎがあつて金を儲けて男優りに飲酒もし楽しみますと云ふ」<sup>(44)</sup> とする。

一九二八年三月、雪解けが進み小牧ダム工事が再開されると、再び労働者が集まってきた。「茲に燕の如き生活を



送る幾多の鮮人ははるばる宝の山でもほりあてる目論見で本月〔三月〕来約五百名近くも庄電の小牧堰堤工事場へ入込んで来たので、冬季の間は全くひっそりしていた料理屋、飲食店を始め各種の商店では書入時の襲来と夫々目の廻る様な忙しさである<sup>(45)</sup>と述べている。ここでは朝鮮人の数は五〇〇名である。

一九二八年六月二日、庄川水力電気は小牧ダム本体の工事以外の、東砺波、大田村の小牧ダム砂利採取工事は五月三〇日をもって朝鮮人労働者は全員解雇し、今後は地元人だけを採用する方針を決定した。理由は賃金が高く、能率が上がらぬためとした。この知らせは朝鮮人に不安を与えたが、日本人労働者はとても喜んだ<sup>(46)</sup>。これは砂利採取権をめぐる日本人労働者と朝鮮人労働者の間で対立、葛藤があったのではないかと推測する。

#### 〔生活と喧嘩〕

地域住民の小牧ダム建設反対には、朝鮮人労働者が大量にやって来ることへの不安もあった。一九二五年六月の時点ですでに多くの朝鮮人が来ていた。「此工事の進捗と共に多数の内鮮人土工が入り込み家族と共に居住する者が多いので、金屋、小牧、湯谷、湯山等に俄かに新築家屋と飯場が増加し、茲に各種商店も軒を並べるの繁盛振りを呈して行き交う人も非常に頻繁である」。しかし、朝鮮人に対しては「土工中の鮮人は衛生の觀念なく糞便を随所に垂れ流すの慣習あり（中略）万一彼等社会に伝染病等の発生を見る時は其病毒散漫の極、実に恐るべきものあり<sup>(47)</sup>」としていた。つまり、朝鮮人は不潔であり。伝染病をもたらす者とみなされていた。

一九二六年六月時点で、『北陸タイムス』は朝鮮人飯場の状態を次のように記している。「朝鮮人の飯場のごとき戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者（広瀬）

は、三、四間に十間のほつたて小屋同様の板一枚張りで、畳どころかむしろを板の上に並べ、はなはだしきは板だけのところもあり。ここに疲れきつた労働者が唯一の安息所にして、すし詰めにぞこ寝しているが、まさしく豚小屋同然のバラック式小屋の内外から糞尿塵芥が悪習をブンブンはなち、不衛生きわまるものである<sup>(48)</sup>。これは朝鮮人労働者の住居環境がいかに劣悪だったかを示している。

こうした衛生状態のため、朝鮮人は日本人から強い差別感を抱かれた。一九二八年四月、砺波郡東山見村で二歳の子供に天然痘が発病した。富山県衛生課は祖父が農業の傍ら小牧ダム工事場で日稼ぎをしているので、同現場で働く朝鮮人労働者三〇〇名の保菌者から感染したのではないかと疑った<sup>(49)</sup>。また、同年同月、礪波郡中の村の三歳の子供が天然痘の疑いがあることがわかった。富山県衛生課の調査では、真性ではなく水痘とみなされた。その原因は東山見村の天然痘が河川を伝って下流に流れたのではないかとみた。「小牧に於ける庄電工事に従事する鮮人土工の衛生状態がききめて不衛生極まるので、同川〔庄川〕を飲用する下流民は漸く伝染病の流行期に入らんと今日此頃一層注意を要するものあり<sup>(50)</sup>」としていた。朝鮮人労働者を不衛生な環境に置いた建設会社の配下や飯場頭にこそ問題があるといえる。

朝鮮人は劣悪な生活、労働環境にあるため、工事現場や飯場では多くの喧嘩が発生した。『富山日報』等では六件の喧嘩が確認できる。喧嘩は朝鮮人と朝鮮人、朝鮮人と日本人の事例がある。何れも賃金に関する理由が多かった。

① 一九二七年四月一七日、秋山飯場の日本名安藤実（朝鮮名は不明）は砂利杭のことで田中才一郎（四四歳）と激

論を行い、鍬で田中の腰を殴打して骨折させた。<sup>(51)</sup>

② 一九二七年四月二〇日、小牧堰堤工事場で「日鮮土工」の反目が激しく、頻々と殺傷事件があった。<sup>(52)</sup>

③ 一九二七年八月一二日、庄川の川原の砂利採取場で朝鮮人労働者間に乱闘があった。一朝鮮人が賃金を払わぬ朝鮮人の二名に支払いを要求した。二名の親分は一朝鮮人を河原に引きずり出し、石で乱打した。一朝鮮人もこれに応戦したため、双方が瀕死の重傷を負った。<sup>(53)</sup>

④ 一九二七年八月一八日、小牧川原で飯場所有争いから、加藤組配下の「日鮮人」五〇余名が乱闘をした。<sup>(54)</sup>

⑤ 一九二八年四月、森田飯場の日本名秋山一郎（四〇歳）（朝鮮名不明）は素行が悪いため、森田が二回旅費を与えて帰国を促した。四月五日に森田は秋山に三回目として三〇円を渡し、朝鮮への帰国を促した。しかし秋山は「三百円出すなら帰つてやると暴言を吐き、森田に喰つてかからんとせし」という。<sup>(55)</sup>

⑥ 一九二八年四月一日、朝鮮人労働者一〇数名が喧嘩を始めた。一名は後頭部を殴打され、瀕死の重傷を負った。この時点で小牧ダム建設現場には約千名の労働者がいるとする。<sup>(56)</sup>

## （２） 事故と労働争議

### 〔事故〕

小牧ダム工事は規模が大きいため、多くの死傷者が発生したと思われる。しかし、正確な数は不明である。ここでは『富山日報』等に掲載されている事故の記事をあげてみる。全部で一二件となり、死傷者は日本人が九名、朝鮮人

が三名である。これから朝鮮人より日本人に犠牲者が多かったことがうかがわれる。男女別では、男性一名、女性二名である。事故の原因としては、岩石の崩落が多い。

- ① 一九二五年七月三〇日、西川与三次郎（四九歳）が排水溝上の軌道でトロッコと衝突して断崖に墜落し、全治二ヶ月の重傷を負った。<sup>(57)</sup>
- ② 一九二五年一〇月二九日、岩石を満載したトロッコが頭上に落下し、朝鮮人土工が惨死した。<sup>(58)</sup>
- ③ 一九二六年三月一四日、佐藤組の配下田浅松方所属の野尻弥一郎（五九歳）は船で庄川を左岸から右岸に横断中、激流へ転落して死亡した。<sup>(59)</sup>
- ④ 一九二六年三月一四日、古道宅蔵（四九歳）は上から岩石が崩落し、両足の膝関節を折って胸を圧迫し、人事不省になった。<sup>(60)</sup>
- ⑤ 一九二六年六月二〇日、横山吉太郎の妻その（五四歳）は右岸区掘削発破のため避難所で昼食中だったが、逆に左岸の発破で飛んできた岩石に命中し即死した。<sup>(61)</sup>
- ⑥ 一九二六年一〇月一七日、山本権次郎（二三歳）は電線除け工事中に足を踏みはずして墜落し、堆積してあった鉄管で頭部を打ち死亡した。<sup>(62)</sup>
- ⑦ 一九二七年五月二二日、小塚瀧次郎（一八歳）は掘削中に岩石が崩落し、墜落して死亡した。<sup>(63)</sup>
- ⑧ 一九二七年八月一日、加藤組の李在甲（二九歳）はダイナマイトが爆発し、即死した。<sup>(64)</sup>

⑨ 一九二七年十一月一六日、吉田しげ（二四歳）は砂利を入れたバケツ二個が墜落し、その下敷きになり死亡した。<sup>(65)</sup>

⑩ 一九二七年十一月二〇日、和泉政吉（二九歳）は軽便鉄道に跳び乗ろうとして貨車の中に墜落し、轢死した。<sup>(66)</sup>

⑪ 一九二七年二月三日、佐藤組の配下柴田班の大工山下澤松（四三歳）は上空から大岩石が墜落し、圧死した。<sup>(67)</sup>

⑫ 一九二八年五月一三日、李正沫と李孟鏡兄弟（慶尚南道固郡出身）は作業中、弟の李孟鏡が採取機械の上に墜落し、死亡した。<sup>(68)</sup>

#### 〔労働争議〕

小牧ダム建設現場での労働争議は『富山日報』等によれば、三件が確認できる。<sup>(69)</sup> 争議参加者数は比較的少ない。

① 一九二七年七月、庄川で砂利採をしている使役人夫は約三〇〇名だった。このうち、日本人、朝鮮人労働者一〇〇名は三〇余名の下請負と七飯場に分かれていた。一〇〇名の労働者（民族別は不明）は請負価格の引き直し（値上げ）要求を掲げて、ストライキに入った。理由は現在の賃金銀では生活できないとするものだった。<sup>(70)</sup> これに対して、会社側と請負会社は協議をして近く解決の予定だった。<sup>(71)</sup> しかし、なかなか合意にいたらなかった。地方の有志が調停中に乗り出し、会社側は一坪一四、一五円まで値上げをすることで交渉した。<sup>(72)</sup> 最終的にこれまでの坪一〇円を倍程度にすることで合意がなされた。七月一四日から作業を再開することになった。<sup>(73)</sup>

② 一九二七年八月一日、加藤組配下の李在甲（二九歳）はダイナマイトが爆発し、即死した。これに対し加藤組

は弔慰金として一〇〇円を出した。しかし、同僚の朝鮮人達には彼には妻子がおり、五〇〇円を出せと要求して、激高した。これは金額よりも「加藤組が誰一人もお悔やみにこなかった」ことを問題視していた。朝鮮人は自分たちで葬式を出し、加藤組と交渉の予定だった。<sup>(74)</sup>

- ③ 一九二八年六月二日から朝鮮人一五名は同盟罷業を行なった。理由はこれまでトロツコ一日二三銭(三人一組)で一日に四四回往復し、一名平均一円七〇銭だった。朝鮮人はこれでは「喰えぬ」として、トロツコ運搬賃金を一五銭にするように要求した。これに対し、雇主との間で妥協が成立し、一三銭を一四銭に上げることになった。<sup>(75)</sup>

### (3) 労働組合結成の動き

一九二六年初頭に在日本朝鮮労働総同盟(以下、在日朝鮮労総)はオルグとして、金泰燁(突破)(一九〇二―不明)、朴広海(一九〇二―一九八二)などを富山県に派遣し、土建労働者の組織化にあたった。金泰燁は後に、「私は毎日〔高岡から〕富山に出て、東京や大阪にいた頃の同志や知人、そして日本の労働団体を訪問しながら、同市を糾合する一方、この地方のいろいろな作業場と韓国人労働者の実態把握そして労働条件などを一つ一つ綿密に調査していった」と回顧している。金泰燁は土木現場には様々な立場の朝鮮人がいるため、親方やヤクザ、労働者まで「とりあえず韓国人の労働団体を作ることにした。それでかれらが考え直して正しい道を歩んでくれれば幸いだし、万一そうならなければその時になって対策を立てることにした」<sup>(76)</sup>と述べている。

一九二七年七月、金泰燁は富山県在住の二〇〇〇名の朝鮮人土建労働者を一つにまとめ、「富山白衣労働信友会」の結成にむけて努力していた。<sup>(77)</sup> 同年八月二〇日、金泰燁が中心になり、富山市内の仏教会堂で「富山白衣同盟信友会」(以下、信友会)が結成された。会合には黒部、庄川の水電工事場の朝鮮人土建労働者の代表八〇名が参加した。李愚軒が開会の辞を述べ、座長に金泰文が就任し、会則規定を協議した。演説の中で、「支配階級の冷遇！資本家階級の酷使から脱出して自由公明な新社会に突進せねばならぬ」と絶叫した。会員は会の名称通りに白衣を着用した。<sup>(78)</sup> 金泰燁の回想によれば、信友会の内部では金泰燁、権学祚、裴又介、徐斗淳らの右派と朴広海、金周民らの左派があり、双方は激しく対立していた。金泰燁らは別個に朝鮮人親睦会を組織し、朴広海らは信友会の事務所を占領した。二つの組織は後に暴力事件を起こした。<sup>(79)</sup>

座長の金泰文について、朴広海は「富山の方は委員長がいたです。金泰文といって六十いくつかの人で、土方の親方だった。南朝鮮にいつて農民運動をやつてきれいに死んだ。とにかく一字知らない人間で、朝鮮人で日本共産党第一号が富山から出たんですよ。それだけに若い青年たちが感激した」<sup>(80)</sup>と、回顧している。この発言が正しければ、後には金泰文は朴広海らの左派にいったと思われる。

一九二七年二月二六日、高岡市で労働農民党高岡支部が「悪政撤廃の政談演説」を開催した。ここに信友会の朴広海が登場し、「官憲の言論に対する圧迫を滔々とのべたてた後、過般問題視された県営水電工事場の騒擾事件に言を進め、新庄警察署は橋本組と握手し、鮮人を無暗に検束して云々」<sup>(81)</sup>と語った。

一九二八年四月二〇日、信友会を解散し、在日朝鮮労総へ加入することを決定し、富山市仏教会堂で解散、並びに北陸朝鮮労働組合の創立大会を行なった。<sup>(82)</sup>同年四月に日本労働組合評議会が解散され、同年十二月に日本共産党の指導下で日本労働組合全国協議会（全協）が結成された。朴世用（一九〇五～一九三七）は北陸朝鮮労働組合を全協土建部の影響下に置くための活動を行なった。朴は一九三一年十二月、大山村を中心に約二二〇名の朝鮮人労働者を富山土木建築労働組合に再編する。この内部に全協日本土建富山支部が結成された。これに先立ち、同年十一月、朴世用は検挙され、治安維持法違反で起訴され、未決三年の後、懲役六年の判決を受け、金沢刑務所に収監された。二年して和歌山刑務所に移るが、一九三七年に肺結核で重態となり、仮出獄するがまもなく死亡した。享年三三だった。<sup>(83)</sup>

## おわりに

以上、述べたことを要約すれば、次ぎの通りである。

岐阜県、富山県を流れる庄川に浅野総一郎は水力発電所設置を計画した。小牧ダム建設を計画し、一九一九年に庄川水力電気を創設した。具体的な建設計画が立てられたが、不況や関東大震災の影響があり、中止となった。小牧ダム建設案は、地域住民（木材業者、漁民、農民）の激しい反対運動を引き起こした。中でも飛州木材は工事を引き継いだ日本電力を一九二六年、一九三〇年に訴え、これは「庄川問題」と呼ばれた。最終的に、一九三三年八月に両者



は和解した。

一九二五年に日本電力は工事を再開した。中心になったのは石井顕一郎土木部長である。小牧ダムは堤高七九・二m、堤頂長三〇〇・八m、堤体積三〇万m<sup>3</sup>のアーチ型重力式コンクリートダムである。これはそれ以前の最大である大井ダム（堤高五三・四m、一九二四年竣工）を大幅に越え、アジア最大だった。小牧発電所の出力は七万二千kWだった。ダムの堤体は庄川水力電気の直営とし、その他の工事は建設会社の加藤組、佐藤組が受注した。

一九二六年に富山県の朝鮮人は約三千人であり、大多数は土建労働者だった。富山県在住朝鮮人の男女比を見ると、男性は女性に対し一九二七年が約一二・五倍であり、一九三〇年が約五・五倍だった。これは急速に女性の数が増加したことを示している。小牧ダム工事の労働者数（日本人、朝鮮人）は、一九二六年時点で一二五〇〇名である。朝鮮人の数は少なくとも、一日五〇〇名以上である。冬場は野外での工事が停止されたため、朝鮮人労働者は工事現場を離れ、春になると再び工事現場に集まった。

朝鮮人は劣悪な居住環境にあり、伝染病をもたらし者として差別視された。現場では六件の喧嘩が確認でき、朝鮮人と朝鮮人、朝鮮人と日本人の場合があった。原因はいずれも賃金をめぐる対立だった。現場では一二件の死傷事故が確認でき、被害者は日本人九名、朝鮮人三名である。事故の原因は岩石の落下が多かった。労働争議は三件が確認できるが、争議者数は少なかった。

朝鮮労働総同盟から派遣されたオルグの金泰燁などが中心になり、一九二七年七月に富山県内の土建労働者代表

八〇名が集まり、富山白衣同盟信友会（信友会）が結成された。しかし、信友会の内部には左右の路線対立があった。一九二八年四月に信友会を解散し、在日朝鮮労働総同盟に加入することを決定した。同年一月に日本労働者組合全国協議会（全協）が結成され、朴世用らが富山県で活動し、一九三一年二月には富山建築労働組合に再編された。

## 注

（1） 広瀬貞三「三信鉄道工事と朝鮮人労働者―『葉山嘉樹日記』を中心に」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』四号（二〇〇一年三月）、同「太田川水系発電所工事と朝鮮人労働者」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』九号（二〇〇六年六月）、同「戦前の富士川水系笛吹川改修工事と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』四八巻一号（二〇一六年六月）、同「戦前の木曾川における発電所工事と朝鮮人労働者」『福岡大学研究部論集A…人文科学編』一八集二号（二〇一八年十二月）。

（2） 土木学会土木史委員会編『日本の近代土木遺産―現存する重要な土木構造物2000選』（丸善、二〇〇一年）一四七、一四八頁、北河大次郎・後藤治編著『図説・日本の近代化遺産』（河出書房新社、二〇〇七年）一一三頁、土木学会編『日本の土木遺産―近代化を支えた技術を見に行く』（講談社、二〇一二年）七四～七七頁、土木学会編『土木コレクションHNDSEYES』（同学会、二〇一四年）八二頁、文化庁文化財部記念課編『近代遺産調査報告書―エネルギー産業』（同部、二〇一六年）一五一～一五三頁。

(3) 堀江節子・此川純子・内田すえの『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』（桂書房、一九九二年）。この工事を題材にした小説が、吉村昭『高熱隧道』（新潮社、一九六七年）である。しかし、朝鮮人労働者に関しては全く言及していない。

(4) 富山近代史研究会『富山県戦時朝鮮人強制連行関係資料目録』（同会、一九九八年）二三八〇頁。（以下、『資料目録』）

(5) 一九二一年一月時点で富山県内の新聞として講読部数が多いのは、『北陸タイムス』、『富山日報』、『高岡新報』、『富山新報』、『大阪毎日』等の順である。ただ、富山市で講読数が一番多いのは『富山日報』である。富山県『富山県史・史料編Ⅶ・近代・下』（同県、一九八二年）一四八〇～一四八一頁。前掲書堀江節子他『黒部・底方の声―黒三ダムと朝鮮人』一六四頁。今回は一九二五年四月一日から一九二八年一〇月三〇日までの、三年七ヶ月分を調査した。

(6) 建設省・北海道開発庁等監修『日本の川―自然と民俗』一卷（新公論、一九八七年）一四七～一五〇頁。庄川の歴史と文化に関する詳細は、庄川編さん委員会編『庄川』（庄川右岸左岸水害予防市町村組合、一九六四年）参照。

(7) 久保田雄二編『日本電力株式会社十年史』（日本電力、一九三三年）五〇五～五〇八頁。浅野については、浅野泰治郎・浅野良三『浅野総一郎・改訂』（浅野文庫、一九二五年）、北村惣吉『浅野総一郎』（千倉書房、一九三〇年）参照。

(8) 以上は、次ぎの史料を参考にした。北陸タイムス社出版部『庄川堰堤―反対の理由と経過』（同部、一九二六年）、庄川水力電気・昭和電力『庄川筋に於ける流水問題に就いて』（同社、一九三二年）、石山賢吉『庄川問題』（ダイヤモンド社、一九三二年）、石井頼一郎『ダムの話』（朝日新聞社、一九四九年）一七二～一八〇頁、井波町史編纂委員会編『井波町史』下巻（同町、一九七〇年）一〇四四～一〇四九頁、庄川町史編さん委員会編『庄川町史』下巻（同町、一九七五年）四三八～四四四頁、富

山県『富山県史・通史編Ⅵ・近代下』（同県、一九八四年）九七四～九八三頁、富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典』上巻（北日本新聞社、一九九四年）八五五頁、安達實・髭本裕昌・北浦勝「庄川ダム建設と流木問題」『土木史研究』一八号（一九九八年五月）五六一～五六八頁。平野に関しては、木下青嶂『平野増吉翁伝』（同刊行委員会、一九六〇年）参照。

庄川問題に対する富山県内の新聞社の対応については、「富山県言論の軌跡」編集員会編『富山県言論の軌跡』（北日本新聞社、二〇〇〇年）八五～九〇頁参照。

(9) 前掲書石山賢吉『庄川問題』四三四頁。石山に関しては、『回顧七十年』（ダイヤモンド社、一九五八年）参照。

(10) 鴨緑江の水豊ダム建設（一九四四年竣工）においても、流木対策は大きな問題となった。広瀬貞三「植民地期朝鮮における水豊発電所建設と流筏問題」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』一号（一九九八年三月）参照。

(11) これらの工事は、間組百年史編纂委員会編『間組百年史・一八八九～一九四五』（同社、一九八九年）参照。いずれも広瀬貞三が執筆した。

(12) 藤井肇男『土木人物事典』（アテネ書房、二〇一四年）二八頁。

(13) 前掲書『日本電力株式会社十年史』一一一頁。

(14) 物部については、川村公一『土木界の巨星物部長穂』（無明社出版、一九九六年）、前掲書『土木人物事典』三一五～三一七頁参照。

(15) 以上は、次ぎの史料を参考にした。「小牧発電所工事説明書」『土木建設工事画報』四巻七号（一九二八年七月）一〇～一一頁、

石井穎一郎「庄川水力電気会社堰堤工事」『土木建設工事画報』四卷八号（一九二八年八月）一二一―一八頁、「小牧発電所堰堤工事写真」『土木建設工事画報』四卷九号（一九二八年九月）二三―二九頁、石井穎一郎「庄川水電小牧発電所完成後の威容と設備」『土木建設工事画報』七卷一号（一九三一年一月）四〇―四六頁、石井穎一郎「小牧発電工事報告」『土木学会誌』一八卷四号（一九三一年四月）三八九―四五四頁、石井穎一郎「水圧隧道の漏水に就て」『土木学会誌』一九卷二号（一九三三年二月）一二三―一二四頁、前掲書『日本電力株式会社十年史』五〇五―五一四頁、伊藤令二『堰堤工学』（アルス、一九四七年）一七五―一七八頁、前掲書『庄川町史』下巻、四〇五―四四四頁。

山口文象については、R I A 建築総合研究所編『建築家山口文象―人と作品』（相模書房、一九七二年）参照。また、北陸地方の電気事業全般に関しては、北陸地方電気事業百年史編纂委員会編『北陸地方電気事業百年史』（北陸電力、一九九八年）参照。

（16） 前掲書石井穎一郎『ダムの話』一七三頁。

（17） 「黒部と庄川へ二日の旅―土木学会富山県視察団紀行」『土木建築工事画報』四卷七号（一九二八年七月）三二―三四頁。

（18） 前掲論文石井穎一郎「小牧発電工事報告」四三四頁。

（19） 前掲書『富山大百科事典』上巻、三九七頁。沢田純三「加藤金次郎翁と庄川について」『近代史研究』一〇号（一九九五年三月）（富山近代史研究会）五六―六五頁。加藤には自伝と評伝が混在した『死と網の中に十字架―読者はお売りくださるな』（日本水力工業、一九五二年）がある。しかし、小牧ダム工事については何も言及していない。

（20） 津田誠一『土木人物語』（ジャパンレールウェイ社、一九三三年）一二―一五頁。加藤組は一九二九年から一九三〇年ま  
戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者（広瀬）

で、朝鮮の全羅南道で南朝鮮鉄道工事（光州―麗水）の第一、四工区工事と麗水港工事を担当した。広瀬貞三「南朝鮮鉄道工事と土地収用令」、松田利彦・陳延浚編『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲』（思文閣出版、二〇一三年）五三三―五三五頁。

(21) 佐藤工業一一〇年史編纂委員会編『一一〇年のあゆみ』（同社、一九七二年）一八〇頁。

(22) 前掲書『一一〇年のあゆみ』一四九頁。佐藤工業編『百年の歩み』（同社、一九六一年）があるが、写真集である。佐藤組が木曾川で行なった桃山発電所工事（一九二三年竣工）、笠置発電所工事（一九三六年竣工）については、前掲論文広瀬貞三「戦前の木曾川における発電所工事と朝鮮人労働者」一六二―一六五頁参照。

(23) 前掲書津田誠一『土木人物語』一一七―一一九頁。

(24) 前掲書『一一〇年のあゆみ』一七四頁。

(25) 『富山日報』一九二八年五月二二日、夕刊。新聞記事は、適宜句読点を入れた。

(26) 前掲書『庄川町史』下巻、四二八―四二九頁。服部重敬『加越能鉄道加越線・庄川水力電気専用鉄道』（ネコ・パブリッシング、二〇一七年）二二頁。小牧ダム竣工後の同鉄道についても同書を参照。

(27) 前掲書『庄川町史』下巻、四二六頁。

(28) 前掲書『資料目録』三一頁。

(29) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』一八六頁。

- (30) 『富山日報』一九二六年二月九日、朝刊。
- (31) 『富山日報』一九二六年一月九日、夕刊。
- (32) 『富山日報』一九二七年一月二二日、夕刊。
- (33) 『富山日報』一九二七年五月二二日、朝刊。
- (34) 『富山日報』一九二七年八月二五日、朝刊。
- (35) 『富山日報』一九二八年二月二六日、朝刊。
- (36) 『富山日報』一九三〇年八月一七日、朝刊。
- (37) 『富山日報』一九二七年十二月一五日、朝刊。
- (38) 『富山日報』一九二八年一月二一日、朝刊。
- (39) 前掲書『庄川町史』下巻、四三二頁。
- (40) 『富山日報』一九二五年六月二九日、朝刊。
- (41) 『富山日報』一九二五年八月三〇日、朝刊。
- (42) 『富山日報』一九二六年六月一九日、夕刊。
- (43) 『富山日報』一九二七年四月一七日、朝刊。
- (44) 『富山日報』一九二七年八月二日、朝刊。

戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者（広瀬）

- (45) 『富山日報』一九二八年三月一二日、朝刊。
- (46) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇九頁。
- (47) 『富山日報』一九二五年六月二九日、朝刊。
- (48) 『北陸タイムス』一九二六年六月二一日。前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二二二頁。
- (49) 『富山日報』一九二八年四月二日、夕刊。
- (50) 『富山日報』一九二八年四月二二日、朝刊。
- (51) 『富山日報』一九二七年四月一九日、夕刊。
- (52) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇五頁。
- (53) 『富山日報』一九二七年八月一四日、夕刊。
- (54) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇六頁。
- (55) 『富山日報』一九二八年四月七日、朝刊。
- (56) 『富山日報』一九二八年四月一四日、夕刊。
- (57) 『富山日報』一九二五年八月五日、朝刊。
- (58) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇二頁。
- (59) 『富山日報』一九二六年三月一六日、夕刊。



- (60) 『富山日報』 一九二五年三月一九日、夕刊。
- (61) 『富山日報』 一九二六年六月二日、夕刊。
- (62) 『富山日報』 一九二六年一〇月一七日、夕刊。
- (63) 『富山日報』 一九二七年五月二三日、夕刊。
- (64) 『富山日報』 一九二七年八月一四日、夕刊。
- (65) 『富山日報』 一九二七年一月一八日、朝刊。
- (66) 『富山日報』 一九二七年一月二三日、朝刊。
- (67) 『富山日報』 一九二七年二月六日、夕刊。
- (68) 『富山日報』 一九二八年五月一五日、夕刊。前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇八頁。
- (69) 一九二六年五月、小牧ダム建設工事に従事する朝鮮人八四〇余名が結集してストライキを断行した。五月二九日、朝鮮人は会社側と妥協が成立し、ようやく就業したという。前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇三頁。『資料目録』によれば、『北陸タイムス』一九二六年六月一日の記事によると思われる。しかし、他の争議と比べて労働者の数があまりにも多く、『富山日報』には関連記事がない。このため、新聞記事の信憑性に疑念を持つ。
- (70) 『富山日報』 一九二七年七月二日、朝刊。
- (71) 『富山日報』 一九二七年七月三日、朝刊。

- (72) 『富山日報』 一九二七年七月八日、朝刊。
- (73) 『富山日報』 一九二七年七月一日、朝刊。
- (74) 『富山日報』 一九二七年八月一四日、夕刊。
- (75) 『富山日報』 一九二八年六月九日、夕刊。
- (76) 金泰燁著石坂浩一訳『抗日朝鮮人の証言―回想の金突破』（不二出版、一九八四年）一七九―一八〇頁。
- (77) 『富山日報』 一九二七年七月二九日、夕刊。
- (78) 『富山日報』 一九二七年八月二〇日、朝刊。『北国タイムス』 一九三七年八月二二日。前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇六頁。金泰燁の回顧録の信憑性について、内山弘正は懐疑的であり、「彼の本は個人プレーを中心としたもので、「運動史」の資料としてはほとんど価値がない」と断定している。内山弘正『富山県戦前社会運動史・補遺訂正』（同刊行委員会、一九八七年）七四頁。しかし、『富山日報』の新聞記事には「金突破」の名字が二回のおつており、彼の証言には一定の信憑性があるとみる。
- (79) 前掲書『抗日朝鮮人の証言―回想の金突破』一八二―一八六頁。
- (80) 「聞き書き」朴広海氏 労働運動について語る（1）『在日朝鮮人史研究』 一九号（一九八九年一〇月）九九頁。
- (81) 『富山日報』 一九二七年二月一六日、夕刊。
- (82) 前掲書堀江節子他『黒部・底位の声―黒三ダムと朝鮮人』二〇八頁。

(83)

以上は、次の史料を参考にした。爪年俊教編『富山県警察史』上巻（富山県警察本部、一九六五年）七一二～七一三頁、内山弘正『富山県戦前社会運動史』（同刊行会、一九八三年）一九三～二〇五頁、前掲書『富山県県史・通史編Ⅵ・近代下』九四七～九四八頁。全協と朝鮮人労働者については、岩村登志夫『在日朝鮮人と日本労働者階級』（校倉書房、一九七二年）第四章を参照。また、全協土建のオルグとして、富山県に入った沈相弘、新潟県に入った林尚徳の聞き取りに関しては、金賛汀『雨の慟哭―在日朝鮮人土工の生活史』（田畑書店、一九七九年）一四一～一八一頁参照。